

## 鶏足山に関する基礎調査

### 打本 和音

#### はじめに

鶏足山は、弥勒下生をめぐる信仰を考える上で重要な地名の一つとしてしられる。釈迦の高弟である摩訶迦葉が、釈迦仏より伝法の象徴たる衣を託され、未来世に現れる弥勒仏へと献じるべく、鶏足山山中にて生身のままで待機すると  
の伝承は広く知られ、初期仏教以来、様々な仏典に類似のプロットが散見される。さらに、この山にまつわる記述はインドを旅した著名な僧侶たちの伝記中にも確認でき、彼らが彼の地を目指したことがわかる。

釈迦の十大弟子のなかにあつて頭陀第一と謳われた摩訶迦葉が生身のまま待機するという伝承、未来世における弥勒と摩訶迦葉の邂逅の地であること、さらには著名な求法僧が見聞していることなどが相まって、鶏足山自体への憧憬も生まれ、造形化のみならず、新たな鶏足山が「作られる」など、場所（地名）としても重視されてきた<sup>(1)</sup>。このように、鶏足山は弥勒信仰史を考えるうえでポイントになる地である。ただし、釈尊の八大聖跡ほどの認知度はなく、積極的な調査研究が行われてきたとは言い難い<sup>(2)</sup>。

そこで本研究ノートでは、過去から未来への伝法の象徴の地としての役割をも担ってきた鶏足山に着眼し、鶏足山に端を発する多様な文化事象について考察していくその前段階として、従来指摘されてきた「下生経類」との関連のもとに鶏足山をめぐる言説の整理を行う。

また、この鶏足山については、インドの実際の地名への比定が試みられており、主にA. Cunningham<sup>(3)</sup>のKurkihar説やR. D. Banerjee<sup>(4)</sup>のGurpa hill説が知られる。ここでは後述の通りBanerjee説を採用することに、Gurpa hill調査を踏まえての状況報告も併せて行うこととする。

#### 一、聖地としての鶏足山

未来世に、釈迦に次ぐ次代のブッダとして地上におりたことが約束された尊格である弥勒（Skt. Maitreya, Pā. Meteya）は、汎アジアで広く信仰を集めた。そ

の弥勒に対する信仰の根本経典として位置づけられる六経が、左記に示す、いわゆる弥勒六部経と呼ばれる経典群である。

- ① 東晋代失訳『弥勒来时経』（T14, No. 457）
- ② 西晋・竺法護訳『弥勒下生経』（T14, No. 453）<sup>(3)</sup>
- ③ 後秦・鳩摩羅什訳『弥勒大成仏経』（T14, No. 456）<sup>(4)</sup>
- ④ 後秦・鳩摩羅什訳『弥勒下生成仏経』（T14, No. 454）<sup>(5)</sup>
- ⑤ 唐・義浄訳『弥勒下生成仏経』（T14, No. 455）<sup>(9)</sup>
- ⑥ 劉宋・沮渠京声訳『観弥勒菩薩上生兜率天経』（T14, No. 452）

この六経は、弥勒という名の僧が悟りを得て衆生を教化するようになるまでを説くという意味では共通した性質を持つが、その内容は二種に区分される。すなわち、遠い未来世、閻浮提に下生した弥勒が如来となることを説く①～⑤（以後、「下生経類」と呼称）と、現在世、仏弟子であつた弥勒が兜率天に上り弥勒菩薩として待機していることを主題とする⑥『観弥勒菩薩上生兜率天経』とに大別できるのである。このことは、弥勒信仰研究の先駆けともいえる松本文三郎の大著<sup>(7)</sup>によつて指摘されて以来、広く知られることとなった。それに伴い、弥勒信仰の構造も「下生信仰」と「上生信仰」に区分して考察することが通例となっている。

このうち、本稿で主たる話題となる鶏足山（Kukkutapada-giri, Kurkūtapada-giri, Gurpāda-giri）はいわゆる「下生信仰」との関わりのもとに言及されてきた。テキストによつては、狼迹山、尊足山などとも表記されるが、本稿では経典の引用部等を除いて、現在広く使用される「鶏足山」という表記を用いることとする。

一方、摩訶迦葉（Skt. Mahā-Kāśyapa, Pā. Mahā-Kassapa）は大迦葉、摩訶迦葉波、大飲光とも表記され、釈尊の十大弟子のひとりに位置づけられる人物である<sup>(8)</sup>。舍利弗や目連亡きあとの長老格として、釈尊滅後に遺された僧侶たちを率いて七葉窟にて第一次結集を主宰し、その後に続く仏教教団の礎を築いたとされる。

従来、鶏足山は、釈迦の指示を受けた摩訶迦葉が生身のまま弥勒の出世にそなえて待機する場所として「下生経類」に説かれるとされ、弥勒下生信仰に関わる聖地、そして摩訶迦葉に関わる聖地として理解されてきた。

## 二、鷄足山に関する「下生経類」の理解

「下生信仰」と関わる最も整理された段階の經典群として知られるのが、先述の弥勒六部経のうちの五経である。以下に、弥勒下生の物語の中では最も内容が詳しい鳩摩羅什訳『弥勒大成仏経』をもとに、「下生経類」のストーリーを本稿とかわりのある部分を中心に簡単に確認してみよう<sup>9)</sup>。

### 【概要】

#### 「a」説法の開始

マガダ国の降魔処にて夏安居中の時のことである。舍利弗<sup>(10)</sup>が釈迦に対して、弥勒や弥勒出現時の未来の様子を問いかけると、釈迦がそれにこたえるかたちで未来の様子を語りだした。

#### 「b」未来世の閻浮提の様子

未来世には、四大海水の水が減少して大地が広くなり、その広大な大地は鏡のように平坦で、様々な樹木や草花が咲き誇り、天上界の楽園よりも素晴らしきありさまとなるだろう。病や苦しみはなく、人々の寿命は八万四千歳になり、身長も十六丈と高くなるだろう。

そこには、翅頭末と呼ばれる美しい城があり、城下は豊かさや幸福で満ちており、人々の表情も明るい。道は清浄であり、夜には多羅尸棄という名前の龍王が雨を降らせるので、香油を塗ったようにつややかであるだろう。また、跋陀婆羅除塞迦という名の夜叉神が常に城を守護し、掃除をしている。糞尿の汚れは大地が裂けて取り込み、また元通りになるだろう。

戦禍なく、衰えや悩みもなく、人々には互いに慈しみの心がある。常に良い香りがして、流れる水は甘い。穀物はよく実り、一度種をまけば七回収穫があるだろう。

#### 「c」転輪聖王について

その国は、穰佉という名の転輪聖王によって、権力と武力を行使せずに治められるだろう。穰佉転輪聖王は、千人の息子と七宝を所有するだろう。

また、四つの大蔵があり、伊鉢多大蔵は乾陀羅国に、般軸迦大蔵は彌提羅国に、賓伽羅大蔵は須羅吒国に、穰佉大蔵は婆羅捺国古仙山処に、それぞれあり、

それぞれの中は珍宝で満たされている。また、それらはそれぞれ龍王によって守護されている。人々はそれを見に行くが、宝物に対して執着の心を起こさず、過去に執着の心を起こして争った人々のことを思い、嫌悪の心を生じるだろう。

#### 「d」弥勒の出世と成道

そのとき、城中には大婆羅門がいて、名を修梵摩、妻は梵摩拔提というだろう。弥勒は、彼らを父母として生まれるだろう。身は紫色で、三十二相を具え、さながら鍔金像のようである。弥勒は衆生の苦しみを目の当たりにし、世俗の生活を楽しめず、出家の希望を持つだろう。

ときに、転輪聖王は弥勒に美しい七宝台を布施するだろう。弥勒はそれを受けるとすぐに、婆羅門たちに喜捨するだろう。すると婆羅門たちは即座にその美しい塔を分解し、等分にしてしまうだろう。その様子に無常をみてとった弥勒は出家し、出家したその日にたちまち龍華樹の下で作仏するだろう。

#### 「e」龍華三会

穰佉転輪聖王や後継者一名を除く九百九十九人の王子たちを筆頭に、多くの人々が弥勒仏のもとで出家を志すだろう。そうした人々を見た弥勒は、「ここに集まる人々は、かつて釈迦によって教化された人たちであろう」と理解したうえで、亡き後も弥勒のもとに來られるように教え導いた釈迦を三度にわたって称え、その後三度にわたって法を説くだろう。

第一会では九十六億人、第二会では九十四億人、第三会では九十二億人の人がそれぞれ阿羅漢のさとりを得るだろう。のみならず、それぞれの法会では天人たちや八部衆も、ともに救済されるだろう。

法会が終わると、弥勒は多くの弟子や天人たちを率いて城下に入って乞食を行い、その後七日七夜禪定に入るだろう。

#### 「f」弥勒と大迦葉との邂逅

そのとき、弥勒は弟子たちを率いて耆闍崛山に赴き、狼跡山に登り、その山頂で足の指をもって山を踏みしめる。すると大地は十八相に振動するだろう。山頂にて弥勒が両手で山を開くとき、梵天がやってきて天上界の香油を迦葉の頭頂にそそぎ、大鍵椎を打ち鳴らし、大法蠡を吹くと、大迦葉は滅尽定から覚め

るだろう。そして、釈迦から託された法衣を弥勒へと渡すだろう。

その時、迦葉の小ささを誇るものが現れるため、弥勒は「この方を軽んじてはならない」と窘めたうえで迦葉の功績をたたえるだろう。すると、迦葉は空中で十八変を成すなど神通力を人々に見せ、それを目の当たりにした多くの人や天人が済度されるだろう。

その後、迦葉は弥勒の前を辞し、般涅槃するだろう。遺骨を納めた塔を山頂に立てると、弥勒は迦葉を讃嘆するだろう。

#### 「g」説法の終わり

釈尊が語り終えると、舍利弗と阿難が立ち上がり、本経の題名等について問いかけた。釈尊が応じると、その場にいた人々はみな大いに歓喜し、去った。

以上が『弥勒大成仏経』の概要である。みてきたように、「下生経類」では、人間の寿命が八万（四千）歳に達した、豊かで理想的な閻浮提において、世界を法治する転輪聖王・穰佉<sup>1)</sup> Saṃkhaの都城、翅頭末<sup>2)</sup> Ketumatに弥勒が誕生し、やがて城外の龍華樹の下でたちまちに成道して弥勒如来となり、人々を救済することが説かれる。「人寿八万（四千）」、「穰佉（あるいは螺）」、「龍華」といったキーワードは「下生経類」のなかで共有されており、ストーリー展開自体もおおむね踏襲されている。ただし、經典ごとに細部はヴァリエーションがみられる。

そして、今回問題となる迦葉にまつわる記述（f）については、五経のなかで最もはばらつきがある部分となる。まず、「f」にあたる記述を持つものは五経中三経ある。すなわち、先の『弥勒大成仏経』のほか、鳩摩羅什訳の『弥勒下生成仏経』、伝竺法護訳の『弥勒下生経』であり、失訳『弥勒来時経』と義浄訳『弥勒大成仏経』には見えない。さらに、「f」の記述を持つ三経のなかでも、その内容は異なる。

まず、先に示したように、鳩摩羅什訳『弥勒大成仏経』では、弥勒が成仏のちに翅頭末城での乞食・禪定をおえ、摩訶迦葉に相まみえる為に弟子たちを引き連れて耆闍崛山に赴き、「狼迹山」に登ること、さらに山を開いて禪定に入っている摩訶迦葉を梵天の力も借りて目覚めさせることなどが説かれる<sup>1)</sup>。

しかし、おなじ鳩摩羅什訳でも『弥勒下生成仏経』では、耆闍崛山に赴くところは共通するものの、「爾時彌勒佛、欲往長老迦葉所。即與四衆俱就耆闍崛

山、於山頂上見迦葉」(T14, No. 454, p. 435c)とのみ記され、鷄足山や狼迹山といった具体的な山岳名称や、摩訶迦葉を目覚めさせるための工程についての言及はなく、頂上にて摩訶迦葉に相まみえたことのみを説く。

さらに伝竺法護訳の『弥勒下生経』では、釈迦が「迦葉比丘、屠鉢歎比丘、寶頭盧比丘、羅云比丘」(T14, No. 453, p. 432b)に対して、涅槃に入らずに弥勒の出現まで待機するよう指示し、摩訶迦葉のみ「摩竭國界毘提村中、迦葉於彼山中住」(T14, No. 453, p. 432b)と待機場所が明示される。

このように、「f」に当たる迦葉と弥勒の邂逅の物語は、「下生経類」のうち五経中二経には見られないこと、かつ、「f」に類する挿話も三経でそれぞれに内容が若干異なることは、注意が必要である。ここから、従来指摘もあるように、「下生経類」にとつて「f」が増広部分である可能性はあるが、今後より慎重な検討が必要である。

また、本稿の趣旨に関わって、「f」の挿話を有する「下生経類」中の三経に「鷄足山」という訳語が用いられていないことにも注意したい。唯一『弥勒大成仏経』で「狼跡山」なる訳語が示されるが、これはKurkupadaやkurukarapadaと捉えたうえで訳されたものであるとされてきた。「狼跡山」という訳語の背景に「鷄足山」と類似のニュースソースの存在が見いだせる一方で、仏教史上よく知られることとなる訳語との差には改めて目を向けておきたい。

#### 三、求法僧の記述

迦葉が弥勒を待つ場としてもっとも認知度の高い「鷄足山」という訳語が「下生経類」中に見いだせない以上、別のテキストがこのチームの認知度形成の背景に想定される。その候補に関する詳細な検討は別稿を予定しているが、ここではまず求法僧の記述を提示しておきたい。先行研究でも指摘があるように、鷄足山に関しては、法顕(三三七-四三二)や玄奘(六〇二-六六四)といったインドを旅した僧侶たちの言及が見られるためである<sup>12)</sup>。

まず法顕の『高僧法顕伝』には、簡潔に「こ」(伽耶城Gaya)から南へ三里行くと鷄足山という山に到る。迦葉は今この山の中に入るとされる。山を裂いて山の下に入ったとされ、入った処は普通の人が入ることができない。旁孔が通じており、迦葉の全身はこの中に住んでいるとされる。孔の外には迦葉がもと手を洗った土があり、土地の人々は頭痛の時にはこの土をとって頭に塗れ



ばすぐ治るといふ。この山中には、いまも羅漢たちが住んでいて、天竺諸国の道人も毎年ここに赴いて迦葉を供養している。この山は榛の木が良く茂っており、また師子、虎、狼が多く、むやみにはいることはできない」<sup>(13)</sup>という趣旨のことが記される。

一方、玄奘の記述は最も詳細である。山容を中心に、本稿に関連する部分のみ抽出すると、「莫訶河を東にすすんで大林野に入り、行くこと百余里で屈屈(原注 居勿反)吒播陀山(原注 唐に雞足と言ふ)に至る。また、寶盧播陀山(原注 唐に尊足と言ふ)とも言う。高い峯は険しく、深い谷は底がないかのようで、山麓の谷川は喬木が谷をうずめ、山の峯々は草が繁茂して巖石をおおっている。三つの峯が峻しく立ち、傍には絶壁がそびえている。気は天にも接するほどで、形は雲に似ている。後に大迦葉波がこの山中で寂滅したので、その名を言うのを遠慮して尊足と呼ぶ。(中略)迦葉は結集も終わり二十年目に、世の無常を厭い寂滅に入ろうとした。そこで鶏足山に行き、山の北側から登り、山を廻って西南の丘に來た。山の峯は險阻で崖の道は塞がっていたので、錫杖でたたくと道が割ったかのように開けた。道に従って進むと、道はまがりくねっていたり、廻っていたり、斜めに通じたりしていた。山頂に至って東北の面に出ると既に三つの峯の中に入っていたので、仏の袈裟を捧げて立つと、三つの峯は迦葉を覆った。そのため、今もこの山は三つの脊稜が隆起しているのである。(中略)現在山上には窠堵波が建てられている」<sup>(14)</sup>といった内容が記される。

この両記述には一定のリアリティがあり、「下生経類」の段階よりも具体的な場が想定されていることをうかがわせる。とくに玄奘の記述は、後述のように現在の Gurpa hill の状況と近いものがある。

#### 四、鶏足山の比定

法顯や玄奘が記録し、「下生信仰」と摩訶迦葉とにかかわる地である鶏足山は、実際のインドの地名との比定が試みられた。

特によく知られるものとしては、A. Cunningham (一八四九—九三) による Kurkihar 説がある。彼は、Gaya と王舎城の間にあるもっとも大きな都市であり、その名前にも名残がみられることから、鶏足山を Kurkihar の地に比定した。ただし、Kurkihar 村の近くに三つの峯を合わせたような場所がないことから、村の北方、約八〇〇メートル地点に三つの丘があることを指摘し、これが法顯の記

述するところを指すのではないかとする<sup>(15)</sup>。カニンガムのいうように、現地から奉献塔や仏像などが多数出土していることから、本見解には一定の信憑性が認められる。したがって、この見解は広く知られるとともに、未だ一定の影響力を持っている。

これに対し、R. D. Banerjee (一八八五—一九三〇) は Gurpa hill を鶏足山として比定した<sup>(16)</sup>。Banerjee は、現在の地名 Gurpa が Gurpada の転訛で玄奘のいう尊足を示すとし、Gurpa hill にみられる岩の裂け目や Gaya からの距離などからみても、求法僧たちの記述によりよく合致するのは Gurpa hill であると結論付けた。Banerji の調査時点で、Gurpa hill の頂上にはレンガによるストゥーパ建立痕とみられるものがあり、玄奘の記述とも合致すると述べる。筆者もまた、Kurkihar と Gurpa hill を訪れてみた限り、Gurpa hill の状況が、より求法僧らの記述に合致すると考える。

#### 五、Gurpa hill の現状

Gurpa hill は現在 Bihar 州に位置する。Gurpa hill の南側は Jharkhand 州との境にあり、釈尊の成道の地 Bodhgaya からは直線距離にして東南へ五十キロメートルほどの地点にあたる。Gurpa hill にほど近い場所にはグルバ駅があり、駅を囲むようにして小さな村落が形成されている【図一】。駅から南に一キロほど整備の行き届かない曲がりくねった道を進むと、Gurpa hill の麓に到達する。筆者は二〇二四年二月に Gurpa hill で単身、状況確認のためのフィールドワークを行った。今後の調査に向けて、以下のとおり、簡略に現状をメモしておきたい。今回は Bodhgaya から出発した。Nirañjana 川（尼連禪河）を支流に有する Phalgu (Falgū) 川を越えて、五十三キロメートルほど車を走らせると Gurpa hill の麓、Gurpa 駅北側の村落に到着する。

Bodhgaya から Gurpa までの公共道路は、近年の工事のために全体として比較的整備された道が敷かれているが、人通りは少なく、道の周囲に店舗もあまり見られない。Gurpa の村落のあるエリアの三キロほど手前からは、細い道の左右に木々が生い茂り、舗装されてはいるものの進みにくい道が続く。乾季にもかかわらずしばしば道をふさぐほど草木が伸びていたため、車両のフロントガラスを枝葉が叩きつける中を進むと、急に道幅が広くなり、グルバ駅付近の村落が現れる。



図1 山頂から見た Gurpa 駅周辺と Gurpa hill 麓までの道

なお、事前に Gaya 駅や Bodhgaya 周辺で計三十名程度の男女に聞き取りを行ったところ、Gurpa hill にのぼったことがある、あるいは友人や親族がのぼったことがあるので知っている、という人は九割ほどであった。のぼる理由は「景色が良いから」というものがほとんどであり、わずかに「ヴィシユヌに詣でるため」といった発言もあった。ただし、のぼっている途中で泥棒に襲われた者、あるいは襲われた者を知っていると証言をする者もあり、登頂に際しては誰かと共に行くこと、あまり長居はしないことをすすめられた。



図2 Gurpa hill の麓より

Bodhgaya で雇った三十代の男性運転手もまた、Gurpa hill に二度のぼったことがあり、登頂には約一時間を要したとのことであった。現地到着後、踏切北側の村落の人々に話を聞くと、頂上までは、現在整備が進んで一八〇〇段の階段があるという。一般的には上るまでに平均として一時間から一時間半程度かかるが、村の成人男性であれば往復二十一分しかからない、近隣住民は日に二、三度はのぼるため、十五分程度で頂上まで駆け上がり、六分程度で下山が可能である、と付近に住む二十代と三十代の男性五名がそれぞれ同様のことを話した。

当初はともに登頂することを希望していた運転手が車での待機に意見を切り替えたことと、村人二名が雇用を申し出たことから、彼らとともに登頂することとし、村落を出発した。手動の踏切を越えて Gurpa 駅を南進し、舗装されないアップダウンの激しい道を一キロほど進むと Gurpa hill の麓に出る。麓では道を均す作業や階段を新たに作る作業がのんびりとすすめられていた。前方の新緑の中に小高く突き出た山と、その右側にやや低めの山が見えたが、下から見上げる限りでは三つの山が合したようには見えなかった【図2】。

舗装作業中の道のわきに車を停めさせてもらい、雇用した村人二名と登頂を開始した。ただし、その日は村人以外にのぼりにくる者がいなかったこと、日本人女性のがのぼるのが珍しく感じられたことを理由に、結局十数名の村人や子どもたちがついてきた。



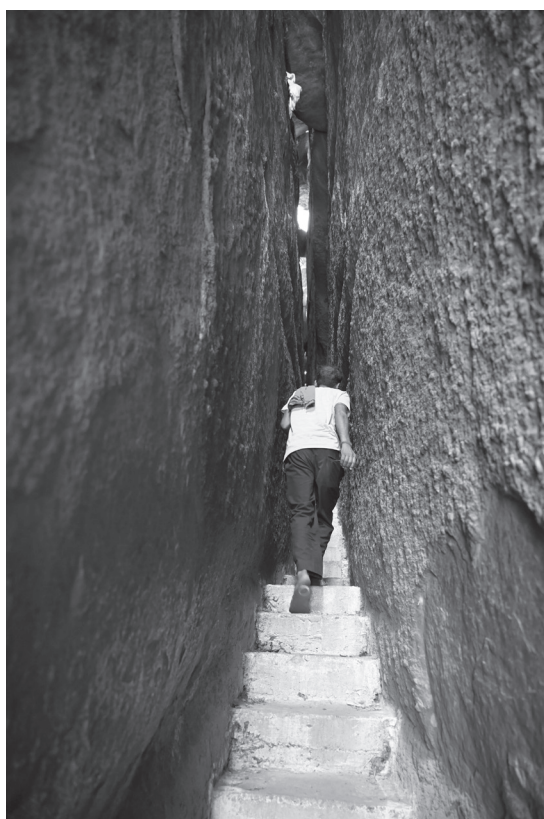


図3 後ろから強力なライトで照らした岩の裂け目の道の様子

乾季にもかかわらず鬱蒼とした緑の中、山肌の土面に段差の大きい石段が配されており、ときおりその左右に巨岩が転がっていた。石段は、巨岩の隙間を縫うように曲がりながら上に向かって配されており、八合目あたりにヴィシュヌを祀るひらけた場があった。二メートル超の板状の岩と、それに守られるように置かれた小さな石たちにヴィシュヌを示す紋などが赤と白のペンキで描かれただけの露天の廟を越えると、それ以降は砂地に代わって岩地が中心になった。九合目あたりまでのぼると、一方通行の先に大きな岩壁がそびえており、その岩の一部が縦方向に裂けたようになっている。石窟調査用の強力なライトで裂け目内部を照らすと、薄暗がりの中に上方に向かって白いペンキを塗られた階段が続いているのが見て取れたが、最奥までは見通せなかった。

裂け目は天井部に向かうほどその幅を狭くしていたが、一部からは光がうつすらと落ちる【図3】。狭い場所では二十五センチほどの隙間を数十段直進すると、闇の中にはほぼ九十度左に折れる裂け目があらわれ、それを斜め上にむかつてのぼっていくと緩やかに右へと向かう裂け目が続いており、さらにそちらに向かつて真っ暗な中を階段が続く。裂け目の中を道なりに進むと、唐突に出口に到るが、外に出ると正面は人ひとり立てる程度に均された岩場があり、その先は切り立った崖になっている。



図4 摩訶迦葉像のおさめられる小塔

岩の外に出た後、右手側に巨岩がトンネル状に重なりあつた場所がある。重なり合った岩のあいだを屈みこんでくぐりぬけるとすぐに、こちら側に背を向けるかたちで金色に塗られた小さな塔が建てられている。塔正面に回ってみると、なかには迦葉の像がふたつ祀られ、その周りに仏旗や鉢やお香などが雑多に詰め込まれていた【図4】。

通路入口側に背を向けて塔が建てられているのは、塔正面側は見通しが良くなっているためであろう。小塔正面には数名が坐すことのできるスペースがバブルコーン状に確保され、その先は切り立った崖となるが、Gurupa駅のちょうど反対面、Jhakhand州側が見渡せる。金色の塔を背にしてJhakhand州側を望むと、右側には、ところどころ緑で覆われたとがった小山が、また、左側にはさらに上部へと続く岩肌が見え、その上部に金色の塔の先端が見える【図5】。迦葉の祀られた金色の小塔のわきの通路を引き返し、もとい岩の裂け目の出口に立つと、そこからさらに右手側の岩肌に、階段上の薄いくぼみがほりこまれてある。そこをのぼると、なだらかな傾斜のある巨岩のうえに、全体がオレンジ色で、正面下部は白地に青い花模様のタイルが貼られた祠が建てられている。祠は四つの建物が連なっており、うち三つに屋根がかけられる。ひとつだけ屋根のない部分は、物置として使用されているようであった【図6】。

オレンジ色の祠の裏手に、金色に塗られた塔がある。下層にある迦葉の小塔の付近からみあげると、この塔の先端部が見えていたことになる。塔の周囲は柵を巡らせて整備しており、人ひとりが余裕をもって通れる程度の右繞用のスペースが確保されているが、柵の先は全方位が崖状になっている。

祠裏手の一角のみ、二十名程度が肩を並べて礼拝できるスペースが確保されている。金色の塔の伏鉢部周囲には、付近で掘り出されたという奉獻小塔や小型の仏像がランダムに配置されていた。なお、小像は、金色の塔の手前に並ぶオレンジ色の祠の壁面にも数点塗りこめられており、こちらも今後あわせて調査が必要である。

オレンジ色の祠のうち、屋根のある建物の、向かって一番左側の建物の床面には仏足跡のみが安置されており、その周囲の床面はタイルで固められていた。両足土踏まずの部分に法輪が彫りこまれるほかは、左右で別々のデザインになっている。伝統的なモチーフも見られる一方で、双魚が華綱のようなものを啜えるといった特異な表現も見られ、こうした図像に関する検討は今後の課題としたい。その他の二つには、一方にはヴィシユスバダが、もう一方にはガネーシャをはじめとする神々の小像が置かれていたが、天候の急変による強風の影響で、詳細な確認作業は行うことができなかった。

以上、今回の見聞したところを簡略に示した。現在の状況とどの程度まで合致するかはともかくとして、求法僧たちの記すように、一見して岩肌が目立つ

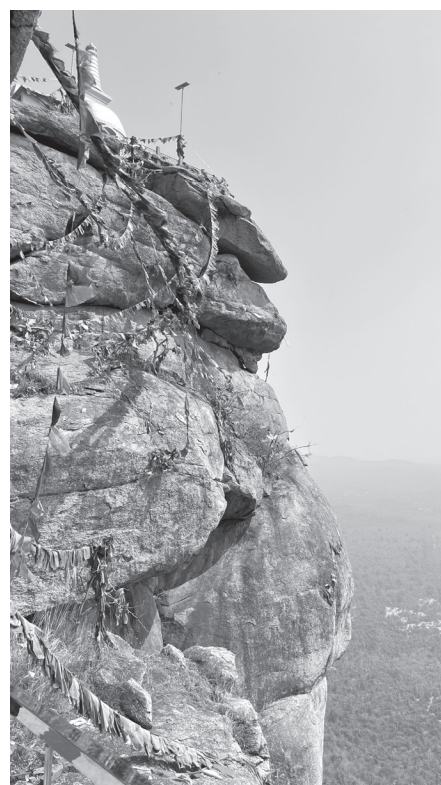


図5 迦葉小塔前のバルコニーより山頂部の塔を望む



図6 山頂の祠と仏塔

山質であった。また、法顕がいうところの、迦葉が「岩を裂いて中に入った」、あるいは玄奘のいう「錫杖で岩を割った」といった表現を思わせる岩の隙間を抜ける道がある点などから、少なくとも求法僧らの記述に登場する鷄足山は、比較的高いような場所が続くKurkhar村周辺域よりも、Gurpa hillを指す可能性が高いように思われた。



## 結びにかえて

以上、未来世の弥勒下生にそなえて摩訶迦葉が待機する場として知られる鶏足山について、「下生経類」の記述と求法僧の記述を中心に確認した。あわせて、現在鶏足山に比定されている Gurpa hill についての現状を簡単に紹介した。

今回の整理を通じて、「下生経類」に見られる記述と求法僧の記述の段階に差が見えることを指摘した。また、求法僧の記述と Gurpa hill の様子が近いことも改めて確認した。今回の予備調査の結果を踏まえて、今後はより詳細な検討をすすめる予定である。

## 註

(1) あらたなる聖地としての鶏足山について言及したものとしては、特に以下を参照した。鎌田茂雄「華嚴思想史より見た鶏足山の仏教」、『印度學佛教學研究』四六一、一九九七、二三五―二四二頁・鎌田茂雄「雲南・鶏足山の仏教」、『国際仏教学大学院大学研究紀要』一、一九九八、一三四頁。また、山中の摩訶迦葉や弥勒との邂逅を果たした摩訶迦葉といった、本稿とかわるモチーフを表現した可能性が指摘される作例として比較的知られたものでは、河北省定県静志寺塔地宮出土北魏興安二年銘石函、四川省成都市万仏寺址出土須弥山図浮彫、安西榆林窟第二五窟主室北壁壁画、笠置曼荼羅図などがあげられる。これら弥勒と摩訶迦葉との関わりを示す造形遺物についても、今後体系的な整理が必要である。

(2) 日本人による鶏足山の踏破の記録としては、以下があげられる。なお、出版年代は実際の踏破時期と異なる。椎野能敬「鶏足山参詣記」『インド巡礼一〇八九日・椎野能敬遺稿集』、かど創房、一九八五・宮坂宥勝「鶏足山 (Kurkiapada-parvata) 考」『成田山仏教研究所紀要』一、一九九四、二九―五四頁。

(3) 三〇三年ごろ訳出とされるが、本経は僧伽提婆訳『増一阿含経』(三八四―五年)との内容の一致が指摘されている。本来の法護訳は失われ、経録に名のある「竺法護訳弥勒下生経」として、後世に関連付けられたとする見解が有力である。小野玄妙「弥勒三部経解題」、『国訳一切経』(経集部2)、大東出版社、一九三二。

(4) 四〇一年の訳出とされる。

(5) 四〇一―二二二の訳出か。

(6) 七〇一―三三三の訳出とみられ、対応するチベット語訳も確認されている。また、本経には梵本 *Maitreyavyākaraṇa* の存在が指摘されており、Lévi によってネパール本、Majumder によってギリギッソ本がそれぞれ発表されているほか、日本でも石上が校訂を行っている。Lévi, S., Maitreya le consolateur, *Études D'orientalisme, La Memoire de Raymond Linossier*, Tome II, Paris, 1932, pp. 355-402; Majumder, P. C., *Ārya-Maitreya-Vyākaraṇam, Gilgit Manuscripts*, vol. IV, Calcutta, 1959; 石上善応「弥勒受記 Maitreya-vyākaraṇa 和訳：附梵文」『鈴木学術財団研究年報』4、一九六八、三五一―四頁。

(7) 松本文三郎「弥勒浄土論」丙午出版社、一九一一(東洋文庫七四七『弥勒浄土論・極楽浄土論』平凡社、二〇〇六)。

(8) 摩訶迦葉に関する研究は枚挙にいとまがないが、今回は主に以下を参照した。森章司・本澤綱夫「摩訶迦葉 (Mañakassapa) の研究」『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究9』中央学術研究所、二〇〇四。

(9) なお、こうした経典群の成立を支えた、あるいは、そこからさらに発展を遂げた経典群も指摘されている。主要なテキストおよび参照した翻訳や関連資料は以下のとおり。DN 26 Cakkavatti-sihanādasuttaṇṭa [DN III, PTS: pp. 58-79; 片山良一『パリー仏典(第二期)5 長部(ディーガニカーヤ)パティカ篇I』大蔵出版、二〇〇五、一二五―一六五頁]; Divyāvadāna 3 [平岡聡「ブッダが謎解く三世の物語」(上)大蔵出版、二〇〇七、一一八―一四一頁]; Maitreya-saṃiti [Emmerick, R. E., *The Book of Zambasta: A Khotanese Poem on Buddhism*, (School of Oriental and African Studies, London Oriental Series, XXII, London, 1968, pp. 304-311); 『聖弥勒発趣経』渡辺照宏「現代人の仏教8 愛と平和の象徴：弥勒経」筑摩書房、一九六六、一六六―二三九]; 東晋・僧伽提婆「増一阿含経」『十不善品』(T125, No.2); 東晋・僧伽提婆「中阿含経」『説本経』(T1, No.26); 後秦・佛陀耶舎「竺佛念『長阿含経』」転輪聖王修行経」(T1, No.) etc.

(10) 伝竺法護訳のみ、対告者を阿難とする。

(11) 爾時弥勒佛、與娑婆世界前身剛強衆生及諸大弟子、俱往耆闍崛山到山下已。



安詳徐歩登狼迹山。到山、頂已舉足大指躡於山根。是時大地十八相動、既

至山頂彌勒以手兩向壁山如轉輪王開大城門。爾時、梵王持天香油、灌摩訶迦葉頂。油灌身已擊大捷椎、吹大法蠡。摩訶迦葉即從滅盡定覺。(T14, No.456, p. 433b)

- (12) 七世紀にインドを旅した義淨(六三五-七二三)の『大唐西域求法高僧伝』にも記載があるが、室利那爛陀莫訶毘訶羅からどれくらい離れたところにある、と地名が列挙されるなかで、正南に七駅行ったところに尊足山がある、といった記述がみられるのみであり、詳細は描写されない。

- (13) 從此南三里行、到一山名難足。大迦葉今在此山中。壁山下入處不容。人下入極有旁孔。迦葉全身在此中住。孔外有迦葉本洗手土、彼方人若頭痛者、以此土塗之即差。此山中即日故有諸羅漢住彼。諸國道人年年往供養迦葉。心濃至者夜即有羅漢來共言、論釋其疑已忽然不現。此山榛木茂盛。又多師子虎狼、不可妄行。(T51, No. 2085, 863c-864a) なお、同箇所の記事は下記を参照した。長澤和俊『法顯伝・宋雲行紀』平凡社、一九七一、一一七頁。

- (14) 莫訶河東入大林野行百餘里、至屈屈(居勿反)吒播陀山(唐言難足)。亦謂、寔盧播陀山(唐言尊足)。高巒階無極深、壑洞無涯山麓谿澗。喬林羅谷、岡岑嶺嶂、繁草被巖、峻起三峯、傍挺絕嶠。氣將天接、形與雲同。其後尊者大迦葉波居中寂滅、不敢指言故云尊足。(中略) 結集既已至第二十年、厭世無常將入寂滅。乃往難足山、山陰而上、屈盤取路至西南岡。山峯險阻、崖徑槃薄乃、以錫扣剖之如割。山徑既開逐路而進紆曲折、迴互斜通。至于山頂、東北面出、既入三峯之中。捧佛袈裟而立、以願力故三峯斂覆。故今此山三脊隆起。(中略) 故今山上建窣堵波。(T51, No. 2087, p. 919b-c) なお、同箇所の訳文は下記を参照した。水谷真成『大唐西域記』(中国古典文学大系二二)、平凡社、一九七一年。

- (15) S. S. Majumdar (ed.), *Cunningham's Ancient Geography of India*, Calcutta, 1924, pp. 526-8.

- (16) R. D. Banerjee, An account of the Gurpa Hill in the District of Gaya, the probable site of the Kukulapādāgiri, *Journal and Proceedings of the Asiatic Society of Bengal*, Vol. II, Calcutt, 1906.

\*査読を( )担当くださった先生方には有益な( )指摘をいただきました。この場

を借りて御礼申し上げます。

\* 本調査は日本学術振興会特別研究員奨励費(23K11172)「弥勒の救世主化をめぐる基礎的研究」の助成を受けて実施しました。